



阿部 広海

1 m の恐怖

「高所作業1 m (一命取る) から要注意」
「まずゆとり慣れた作業も心にも」

双子の息子(佑一朗と佑次朗)は、家業の工務店を手伝いながら定時制工業高校に通っている。昨年の7月、校内の安全週間で募集した標語コンテストで二人の息子が最優秀賞と優秀賞をもらってきた。その作品である。

現場での危険作業が多い仕事柄、子供たちには躰の一環として安全教育にも心を配ってきた。「いつもゆとりを持って」「何事も落ち着いて考えろ」「最初と最後は必ず確認を」「集中、休憩、メリハリを…。勉強をする時、仕事に向かう時、自転車やバイクに乗る時、いつもこんな言葉をかけてきた。

中学生の頃になると、よく現場に来て仕事を手伝うようになった。職人さんたちのちょっとした油断から起きるケガや事故に直面しながら安全作業の大切さを目で見て学んできたようである。また棟梁のジー様は、ことの他、二人の孫を可愛がって、仕事の段取り、道具の手入れをとおして安全作業の基本

をユーモアを交えながら教えてくれていた。

「高い所の作業は注意せんといけんよ。命とりになるからな…1 m以上あったら危いんよ…」

「どうして1 mなの…?」

「うん、1 m (一命取る) っていうじゃろ。ワツハツハツハツ…」

こんなジー様との会話がヒントになって、あの標語ができた、得意気に話す佑次朗。

この三月の春休み期間中、息子たちが通う高校の体育館の改修工事をする事になった。高さ15 mの天井まで足場を組み、足場と足場に棚板を渡し、そこで作業をするのだが、高所に慣れている私でさえ足が震える恐怖感があった。以前、他の現場で職人が足場から落下して脊髄損傷の大ケガをしまったことを覚えている息子は、落下の恐さを身にしみて感じていた。

「オヤジ、床はコンクリートで危いから学校に頼んで体操用のマットでも敷いてもらったほうがいいよ。」

私は作業中は安全帯をつけるのでその必要はないと思っただが、息子のアドバイスに従いマットを敷くことを了解した。教頭先生に快く許可をいただき、倉庫にある古いマットを床に敷きつめ、上にビニールシートをかけた。気分的にも安心感があり仕事も捗った。

春休み中ということ生徒の体育館使用は禁止されていた。着工してすぐのことだった。夜中、店の電話が鳴った。生徒が体育館の足場から落ちて救急車で運ばれた、とのこと。私はすぐに病院へ走った。幸い生徒のケガは軽い首の捻挫と脳振蕩で大事には至らずに済んだ。

部活の合宿中、夜、窓から入室してボール遊びをしているうちに足場にボールがひっかかってしまい、取ろうとして過って頭から落ちたとのこと。もし床にマットが敷いてなかったら、と思うと背筋がゾツとした。後でわかったことだが、息子が床にマットを敷くように言った理由は、作業安全のためだけではなく、万一、生徒がいたらずで足場に登ることも考えてのことだった、という。同じ学校に通う生徒の心理をよくわかっていたのかもしれない。息子の先見の気配りが一命を救った。

以後、私はいつも万が一を、最悪の事態を想定して現場の安全管理に細心の注意を払うように心掛けていた。

今日も若葉薫る新緑の中、村の寺の改築工事現場で屋根に上り、二人の息子たちと汗を流している。二人の作った安全標語の太い、黒々とした文字の防護シートが初夏の風にまぶしく揺れていた。

おわり